

機関番号： 13903

研究種目： 若手研究（B）

研究期間： 2007～2010

課題番号： 19720095

研究課題名（和文） 中国西南部の同系多言語社会における地域特徴形成の調査研究

研究課題名（英文） Areal Features of the Cognate Languages Spoken in the Multilingual Communities in Southwest China

研究代表者

白井 聡子 (SHIRAI SATOKO)

名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号： 70372555

研究成果の概要（和文）：中国西南部のチベット＝ビルマ系少数民族が話す言語には、文字もなく、これまで詳細があまり知られていなかったものが多い。それらの言語のうち、ダバ語、スタウ語、ギャロン語を調査し、分析を行った。その結果を、周辺で話される他の少数民族言語と対照して、この少数民族地帯の言語に特徴的な現象を明らかにした。この研究により、動詞接頭辞の機能、助詞の性質、視点表示システムなどがこの地域で共有される実態が明らかになった。

研究成果の概要（英文）： In a multiethnic area in southwest China, many little-known and non-literate Tibeto-Burman languages are spoken. I investigated three of these languages—nDrapa (Zhaba), Stau (Daofu) and rGyalrong (Jiarong)—through fieldwork. Moreover, I analyzed the linguistic characteristics of this multiethnic area by contrasting the three languages with neighboring minority languages. This study clarified the details of some areal features such as the functions of verbal prefixes, characteristics of location particles and point-of-view systems.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,000,000 | 0       | 1,000,000 |
| 2008年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2009年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2010年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 総計     | 3,300,000 | 690,000 | 3,990,000 |

研究分野： 言語学

科研費の分科・細目： 言語学・言語学

キーワード： 川西走廊諸語、チベット＝ビルマ語派、チアン語支、記述言語学、地域言語学、フィールドワーク、危機・少数言語、中国

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 中国西南部は多彩な言語文化が見られる少数民族地帯として知られている。中でも、チベット語・漢語・彝語の境界地帯に当たる四川省西部は、1980年頃から、言語学、考古学、文化人類学といったさまざまな研究分野から注目されてきた。言語学の観点からは、上記の3言語以外に、少なくとも12の少数民族言語が存在することが研究開始当時す

で報告されていた。これらの言語はいずれもチベット＝ビルマ語派に属しており、同語派内でも特に複雑な音韻および形態上の特徴を有していることから、通時的研究・共時的研究のいずれにとっても重要であることが何度も指摘されていた。

(2) それにもかかわらず、これらの少数派言語に関する記述資料は圧倒的に不足してい



持つ接辞(図2)が、完了形と命令形において原則として必須となる点、派生的な含意や動詞語幹との恣意的結びつきが発達している点、方向接辞が付加されない動詞の特性、方向接辞が任意となる未完了形において方向接辞が文のアスペクトの意味と相関して機能する点などを明らかにした。

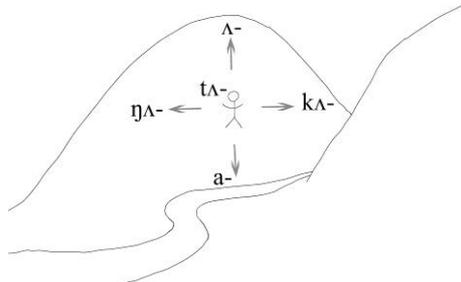


図2：ダバ語の方向接辞

証拠性の体系についての記述研究では、文末助詞によって3つの証拠性が区別される点、証拠性と一見類似するが異なるカテゴリーとして、動詞接尾辞によって表示される中心者の視点の有無がある点などを明らかにした。

存在動詞に関する分析では、存在動詞語幹が6つあって、接辞や小辞との組み合わせでさまざまな存在の様態を表しうる点、そのうち1つの語幹については主語もしくは位格NPに有生物を要求し、いずれが有生であるかによって異なる含意を持つ点、他の存在動詞語幹のうち2つについても項の有生性と存在動詞の意味が相関する点、補助動詞として機能する際に他の動詞連続や助動詞構文とは異なる構造を示す点などを明らかにした。

格標示体系についての記述研究では、12の格助詞と4つの場所接尾辞についてそれぞれの機能や特性を記述し、基本的には主格対格型の格表示体系ではあるが、意味役割が文脈から明らかである場合はゼロ形式が多用される点、場所に関する意味役割表示において動詞の方向接辞が重要な役割を果たす点などを明らかにした。

このほかにも、コンピュータの体系、動詞連続、文形式の体系など、文法現象の諸問題に関する分析を行った。

これらの成果は、内外の学会で発表して研究討議を行い、学術誌に論文として発表したほか、図書①にもダバ語メト方言の語彙・テキストを収録して公開した。以上の成果はダバ語を最もよく記述したのものとして国内外で広く評価されており、他の研究者がダバ語の現象に言及する際に引用されている。

② ダバ語ダメ方言の語彙調査、ギャロン語邛山方言の語彙調査、スタウ語ゲシ方言の語彙と基礎的文法の調査を行った。これらの音声ファイルについてもデジタル保存してあ

る。これらのデータは、ダバ語メト方言との対照研究に利用した。

③ 北京故宫博物院において、『華夷記語』の調査を行った。これは、研究対象地域の言語の語彙を清代に記録した文献である。

(2) 地域特徴の実態とその形成過程の解明：ダバ語の記述を基盤とし、先行研究を用いて、西夏語を含む周辺言語および遠隔地の同系言語との対照を進めて実態を明らかにした。さらに、それらの地域研究の形成過程に関する考察を行った。主たる成果は次のとおりである。

① 動詞形態法の1つである方向接辞は、図3に示すように、系統を超え、地域特徴として広がっている。すなわち、動詞接頭辞が移動の直示的な方向を表示する現象は、この地域で話されるチャン語支の諸言語とチベット語支のペマ語に共通して見られるが、他のチベット語支の言語には見られない。

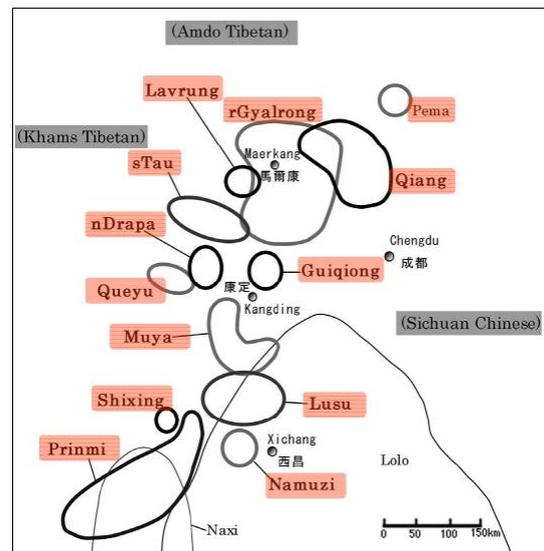


図3：方向接辞を持つ言語の広がり

さらに、方向接辞の機能の発達度を見ると、言語ごとにばらつきがあり、4段階に分けられることが分かった。ペマ語は最も初歩的な段階にあり、周辺の言語からの借用であると結論づけられる。一方で、ムニャ語では方向接辞の化石化が進んでおり、最も進んだ段階にあると言える。

この成果は国際会議で発表して内外の研究者と討論した上で(発表⑥)、さらに改訂して論文の形で発表した(論文②)。

② 視点表示システムの特徴とその分布について、系統的関係を超えて地理的に広がっている実態を明らかにした。

ダバ語は、中心者の視点がある文は明示的な標識のない形式(パターンA)、視点と関

わりない文ではそれを表す接尾辞の付加された形式(パターンB)となる。これにより、動詞の時相にかかわらず一貫して中心者の視点の有無が表示される。このような現象を持つかどうかについて、周辺言語と対照すると、次のような結果が得られた。

- 一貫した視点表示システム：ダバ語、スタウ語
- 部分的な視点表示システム：ムニャ語、ラヴルン語
- 変容した視点表示システム：ペマ語
- タイプが異なるもの：ギャロン語、チャン語

ここで、異なるタイプを示すスタウ語、ラヴルン語、ギャロン語はいずれもギャロン語群の言語である。これらの言語の話される地域とその特徴の相関を見ると、ダバ語と最も近接して話されるスタウ語はダバ語とほぼ同様の視点表示システムを持ち、遠隔地で話されるギャロン語は全く異なるタイプであり、中間で話されるラヴルン語はその中間的な特徴を示す(図4、表1)。

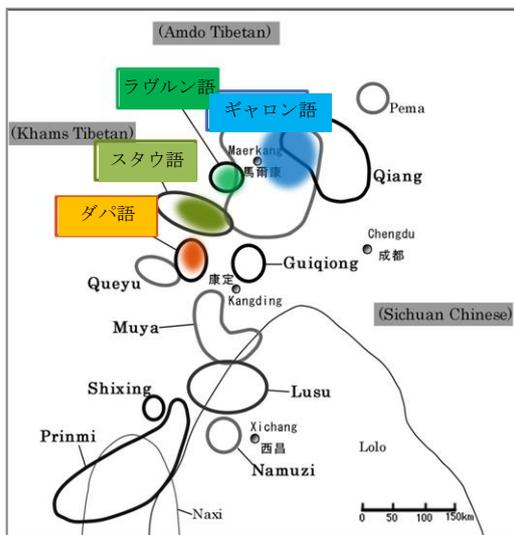


図3：ギャロン語群とダバ語の分布地域

表1：ダバ語(視点)、ギャロン語(証拠性)、ラヴルン語の対照

|      | プロセスへの参与 | 直接的な観察      | 無意識 | 伝聞 |   |
|------|----------|-------------|-----|----|---|
| ダバ   | A        | B           |     | A  | B |
| ラヴルン | (ゼロ)     | se33/tshe33 |     | ?? |   |
| ギャロン | 直接       |             | 間接  |    |   |

このことから、地域特徴が波形に広がるという事例が確認できた。この成果は国際会議で発表し、高い評価を受けた(発表②)。さらに改訂したものを図書①に収録して公開

した。

③ 名詞句における起点と着点の表示体系について、対照研究を行った。ダバ語メト方言では、起点と着点が名詞句において同一形式で表され、起点と着点の区別は方向接辞や語順によって行われる。周辺言語も方向接辞を持つことから、同様の現象を示す可能性が考えられた。そこで、この点について対照研究を行った結果、多数の言語において着点の標識と同じ形式で起点が表示される現象が見られたほか、起点標識を持っていてもチベット語からの借用形式であったり複合形式であったりするという実態が明らかになった。このことから、対象地域においてはもともと起点の標識を持たないという共通特徴があったこと、現在ある起点標識が祖語からの継承ではなくそれぞれの言語において借用や複合によって個別に発達させたものであることを明らかにした。この成果は、国内会議で発表して研究討議を行い(発表①)、改訂して図書①に収録して公開した。

④ 存在動詞を用いたパーフェクト構文について、周辺言語と対照を行った。ダバ語メト方言は多彩な存在動詞を持ち、その存在動詞が補助動詞として用いられると結果状態などを表すパーフェクト構文を形成する。その構文において、存在動詞はアスペクト標識としての文法化がそれほど進んでおらず、結果物の存在、有生性などを反映して用いられる。同様の現象は、チベット語、漢語四川方言といった周辺の大言語に見られるものの、周辺のチャン語支言語では報告されていない。また、この構文はダバ語の中では例外的な構造をしており、さらに同様の含意を通常の動詞連続構文で表現することが可能である。これらのことから、存在動詞を用いたパーフェクト構文が祖語からの継承ではなく、大言語からの構造借用であると結論づけられる。この問題について、国際会議で部分的に言及して研究討議を行い(発表⑦)、さらに研究を進めてその成果を国際会議で発表した(発表⑤)。この発表が高い評価を受け、さらに改訂を加えたものを論文として発表した(論文①)。

⑤ コピュラについて。対象地域の言語のコピュラ体系について初めて対照研究を行い、ダバ語に4種類のコピュラ語幹があること、それらが動詞類と認定されること、否定形におけるアンバランスな体系を持つことなどを明らかにした上で、ムニャ語が類型論的にこれと近い特徴を示すことを指摘した。この成果は国際学会において発表し、内外の研究者と討議を行った(発表③)。

⑥ ダバ語メト方言とギャロン語チョクツェー方言における方向接辞について、対照研究を行った。この結果、多くの共通点がある一方で、ギャロン語には完了・命令の接辞があって方向接辞と交換可能だがダバ語では完了・命令の際に義務的に付加される接頭辞が方向接辞であり代替の接辞がないこと、動詞語幹との恣意的結びつきがギャロン語では一部の方向接辞に偏ってみられるがダバ語ではすべての方向接辞で広く見られることなど、類型的な相違点も明らかにすることができた。

(3) 以上述べてきたような業績は、内外の研究者から一定の評価を受け、チベット=ビルマ語派に関する研究においてしばしば引用されている。また、対象地域の言語を研究する際に地域特徴という視点が重要であることが、学界内で認知されるようになってきている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① SHIRAI, Satoko 2010. “Perfect constructions with existential verbs in nDrapa.” *Himalayan Linguistics* 9.1, pp. 101-122, 査読あり。
- ② SHIRAI, Satoko 2009. “Directional prefixes in nDrapa and neighboring languages: An areal feature of western Sichuan.” *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*. Senri Ethnological Studies 75, pp. 7-20. 査読なし。
- ③ SHIRAI, Satoko 2009. “Auxiliary constructions and serial verb constructions in nDrapa.” *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium* (Studies in Corpus-Based Linguistics and Language Education 2). pp. 241-249. 査読なし。
- ④ SHIRAI, Satoko 2008. “Effects of animacy on existential sentences in nDrapa.” 『言語研究』134, pp. 1-22, 査読あり。
- ⑤ SHIRAI, Satoko 2007. “Evidentials and evidential-like categories in nDrapa.” *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30. 2, pp. 125-150, 査読あり。

[学会発表] (計10件)

- ① 白井聡子 2010/12/18. 「ダバ語、ギャロン語、周辺言語の方向接辞について—チャン

語支における方向と起点の標示—」, チベット=ビルマ言語学研究会第22回会合, 神戸: 神戸学園都市UNITY.

- ② SHIRAI, Satoko 2010/10/17.

“Point-of-view marking systems of nDrapa and other West Sichuan ethnic corridor languages.” The 43rd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. Lund: Lund University.

- ③ SHIRAI, Satoko 2009/11/03. “Copulas in nDrapa.” The 42nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. Chiang Mai: Payap University.

- ④ SHIRAI, Satoko 2008/11/22. “Telicity and directional prefixes in nDrapa.” Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan, Taipei: Academia Sinica.

- ⑤ SHIRAI, Satoko 2008/09/18.

“Existential verbs in verb serializations in nDrapa.” The 41<sup>st</sup> International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, London: SOAS, The University of London.

- ⑥ SHIRAI, Satoko 2008/09/09.

“Directional prefixes in nDrapa and neighboring languages.” Symposium “Linguistic Substrata in Tibeto-Burman Area,” 国立民族学博物館。

- ⑦ SHIRAI, Satoko 2008/05/01. “Auxiliary verbs in nDrapa: In contrast with serial verb constructions.” Chula-Japan Linguistics Symposium, Bangkok: Chulalongkorn University.

[図書] (計1件)

- ① 白井聡子 2011. 『川西民族走廊の言語特徴に関する基礎的報告—ダバ語との対照を中心に—』名古屋工業大学, 88ページ。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:

種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

白井 聡子 (SHIRAI Satoko)  
名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授  
研究者番号：70372555

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：